

「待つ勇気」の意味すること

当 HP の「待つ勇気ある、とっても素敵な係わり合い方に拍手！（「雑学BN」の随想等関係（V）P、2006.09.25.：参照）」の記事を目にしてくれたメル友のある学生から、「『待つ勇気』の意味をもう少し詳しく教えて下さい。」とのメールが届いた。

次のように返信しました。

【 こうした状況でごく一般的に目にするのは、親の心理的都合で、泣いていても抱きかかえてか、それとも、泣いていても叱りながら手を引っ張って行く親の姿ですよ。

一方記事の親子は、子どもが母親の話しかけで落ち着き、「しばらくすると手をつないで、自分から学校へ入って行ってくれました。」ということは、母親は子どもの自主性、主体性を尊重するため、お子さんなりに考えて行動し始めるまで温かく見守りながら待ったということです。

よく見かける大人の都合優先での係わり方が日常的に積み重なると、子どもは親にすら自分の気持ちを伝えることが乏しくなり、また、親の顔色を伺いながら行動するようになり、内面では自己評価、自己肯定、自信が育まれないということになりかねません。

その延長線上として、最近の「手のかからない、おとなしい子どもの方が、先々問題を抱えることが多い。」といわれる所以かなと思われまます。

また、障害児の療育、教育の現場では、「当人の主体性、自主性を大事に！」と云われていますが、周りの大人は、日常のあらゆる場面で「当人の主体性、自主性」が大事にする係わり方をしているのでしょうか。

案外、先読みや段取りをしてしまっている係わり方が、現実には多いのではないのでしょうか。

こうしたことから、子どもがその子なりに考え、主体的に選択した行動が生起するのを「待つ勇気」が、記事の母親の係わり合い方に見え、障害のある、なしに拘わらず、子育ての大事なヒントが含まれていると思ひ、「待つ勇気」と敢えて記した訳です。

なお、「子どもの好き勝手にさせるだけではダメで、しつけが必要！」との声が聞こえてきますが、「しつけ」とは「しつけ糸」から生まれた言葉であり、「しつけ糸」はいつか外さなくてはなりません。

「しつけ糸」は、子どもの内面に主体的、自主的な生きる力が育まれてこそ、外せるものです。

外すことを常に念頭におく「しつけ」とは、取りも直さず、待つ勇気を持ち合わせながら、係わり合うということだと思ひます。 】【

（2006年10月2日 記）